東南欧の歴史的劇場を巡って

海外出張報告 1

本杉省三

アーセナル劇場／簡素な造りに原形を感じる

チェスキー･クルムロフ城の劇場／舞台裏の倉庫

芸術文化施設における施設運営評価の指標について学ぶため，6 ヵ国，12 都市，17 劇場を訪れる機会を得た。訪問先との日程調整は苦労したが，各地の専門家・研究者に会い，大きな成果を得た。以前は新しい施設を中心に回ることが多かったが，近年は歴史的な施設から学ぶことが多く，昨年ドイツを集中的に回ったのに続いて，今年は地理的にやや離れているところ（チェコ，ハンガリー，クロアチア，マルタなど）を選んで回った。紙面の都合上，あまり知られていない劇場を 2，3 紹介したい。

ルネサンス末期の劇場が貴族階級による古代研究や個人的な動機に基づく劇場であったの対して，17 世紀初めに早くも公共性を帯びた劇場が出現している。その 1 つがクロアチアのフヴァルにあるアーセナル劇場（1612 年）で，テアトロ・オリンピコ（1585 年）が遠近法を応用しながらローマ古代劇場を手本とするという範疇にとどまっていたのに対して，ここでは平土間客席を取り囲むようにボックス席が 2 層で構成されて，新しい劇場の姿を獲得している。この施設は，初め軍事用の造船ドックが 1 階部分に作られ，その後 2 階部分が拡張され，乗組員や島民のための娯楽場として劇場が建設された。目下復元工事が進められており，約 400 年前の劇場を現代基準で使用可能とするため，搬入や楽屋，舞台技術設備，避難等困難な問題を慎重に検討している。1 階空間については，観光を考慮してフレキシブルな計画とすべきという意見と島の生活環境を優先した施設とすべきという 2 つの意見に分かれている。アーセナルが街のアイデンティティーであり観光客に対してもアイコン的存在であることは両者認めるところだが，市民生活と観光との折り合いをどの辺りで付けるのか，あなたの意見を聞かせてと博物館長のコルンビッチ教授からの宿題が出ている。

チェスキー・クルムロフのバロック劇場（1776 年）は博物館的存在感がある。観光客数は驚くほど多いが，劇場は見学者数を制限しており，他の城施設とは一線を画した運営を行っている。城に付属する劇場は他にも多く存在するが，大道具や衣裳の製作場や倉庫をもっており，それが今日まで失われることなく丁寧に保存されてきたことに驚きと感謝である。管理運営を任されている協会のスラヴコ博士は，豊かな歴史資料を時間を掛けて整理していく姿勢を貫いている。今自分たちができないことでも，次世代以降の人がやってくれるという研究態度は立派である。バロック劇場に関する国際研究シンポジウムや学生・若者向けの教育セミナーなどを定期的に開催しており，この分野における中心的な存在となっている。

イタリアのモンテ・カステロ・デ・ヴィビオにあるコンコルディア劇場（1808 年）も劇場のあるべき姿を示すものとして印象深い。人口 1,675 人の村に 99 席の劇場である。さすがにこの人口規模で劇場を拠点として舞台芸術作品を制作していくことは難しい。ここでは，ウンブリアという豊かな自然環境とその中の小さな丘陵都市構造，劇場の小ささを売り物として，観光に目を向けながらもコミュニティーの劇場として親しまれ愛されることを選択している。大規模修繕工事後，劇場の管理・運営をボランティアによる劇場協会に任せ，医療・教育・就業などの要因から減少していく人口に対して，劇場活動を通してコミュニティーの結束を深めるとともに，外から人を吸引する魅力をアピールしている。手作りの公演終了後，ブレンチ会長以下参加者自らが持ち寄った飲み物・食べ物で楽しんでいるパーティーには感動した。

最後に，こうした機会を与えていただいた大学ならびに教室の皆さまに感謝したい。

（もとすぎしょうぞう・教授）

コンコルディア劇場／公演準備をしている人々